

# 法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(35)

青葉さへ

見れば心の

とまるかな

散りにし花の名残と思へば

(西行『山家集』)

(たとえ葉桜であつても、眺めれば心が惹かれることよ。散つた桜の名残と思へば)

この歌を詠んだ西行法師(一一一八～一一九〇)は、青々と茂つた新葉に、満開の頃の桜の花びらを重ねました。思えば、今か今かと桜の開花を待ち望み、開けば散るのを惜しんだ春の宵も、遙か昔のことのように感じます。西行は、足早に「散つた桜(過去)」と、今でも「留まる心(現在)」を比べながら、なお残る「余韻」を感じているのでしよう。

風薫る五月……季節は

初夏を迎えています。西行を慕つた松尾芭蕉(一六四四～一六九四)は、この時節の若葉の煌きに目を奪われました。

あらたうと 青葉若葉の日の光

(『おくのほそ道』)

これは、芭蕉が栃木県日光を訪れた際の作です。結句に「日の光」として、「日光」の地名を掛け、その和らかな光に照らされる新緑の目映さを織り込みました。初句の「あらたうと」とは、感動したときに発する「あら尊し」の意味で、感謝の心が込められています。木漏れ日の中で、新しい命の芽吹きに触れたとき、自ずから「ありがたう」の思いが湧き上がってきたのではないでしようか。瑞々しい新緑に目をこ

らせば、「ユズリハ(樫)」という樹木にも目が留まります。新年や祝いごとの飾り物としても用いられるユズリハは、初夏のこの時期に、古い葉と新しい若葉の両方を見ることとができます。ユズリハは、枝先に薄緑の若葉が顔を出すと、それを見届けてから旧葉が落ちます。それはまるで親から子へと上手に受け継がれるように見えることから「譲り葉」と名付けられたのでした。

日本は春・夏・秋・冬の四季に恵まれ、折々に美しい姿を見せてくれます。しかし、春が過ぎ去ると同時に夏となり、夏が終わっていきなり秋が始まるわけはありません。こうした自然の移り変わりについて、兼好法師(一二八三頃～一三五二以後)は、『徒然草』の中で次のように記しています。



春に瑞々しい新緑となる楓は、秋の訪れを待ち次第に紅葉となる

春が暮れて後に夏になり、夏が終わって秋が来るのではありません。春

は春のままで夏の気配を萌し、夏のうちから早くも秋は行き来し、秋はすぐに寒くなり、陰暦の十月(冬の初め)は小春日和の暖かさになって、草も青くなり、梅も蕾を結びます。

木の葉が落ちるのも、まず葉が落ちてから芽を出してくるのではあります。

兼好によれば、その季節の中に、もう次の季節

## 折り折りの記(69)

波多野 重雄

### 山風に子の髪流れ五月来ぬ

高尾山の一号路を登ると、路の辺の木の跡絶えたところを、子らが見通しが良いので駆け上がる、女の子の長い黒髪が舞い上がる。丁度、孔雀が羽を広げたように長髪は風に流れる、髪は女の命である。

風に流れる髪は一瞬人目を引き、その髪に五月の魂が込められているおもいがある。同時に、その子の未来を祝福する感もする。

(高尾山健康登山親睦会々々)

## 百観音霊場巡礼(十五)

### 夏遊逗子

厚木市 荒井 一雄  
波しぶき  
霧・霧と化し たちのぼり  
夕陽が照らし 虹色変化

### 夏、逗子に遊ぶ

車を下りて、山門に向かふ。登拝す、海雲山(岩殿寺)を。夕陽が彩雲(七色)に照り映える雲を創り、碧海(あをみどりの相模灘)は燦燦と輝く。

下車向山門  
登拝海雲山  
夕陽創彩雲  
碧海輝燦燦

## 星野高士先生

### 句碑除幕式



左・立子句碑 中・高士句碑 右・椿句碑

四月二十三日、星野高士先生(写真左)により、新たに句碑が天狗像脇に建立され、除幕式が執り行われた。句碑には次のように刻まれている。

この爽やかな五月にもどこかに梅雨時の空気が含まれているのでしようか。青葉若葉の力強い息吹を感じつつ、そこに自分の命の恵み(芽ぐみ)も重ねてみます。

(栃木北部教区普濟寺中)

古道にも風光る  
高士先生は明治時代の俳人・高浜虚子の曾孫であたり、今回建立された句碑の両脇には、祖母の星野立子様、母の星野椿様(写真中央)の句碑がそれぞれ建てられている。